令和５年度　第１回酒田市総合教育会議議事録

開催日時	令和５年７月３日（月）13：30～15：00
開催場所	酒田市役所３階　第一委員会室
出席者	丸山至市長、鈴木和仁教育長、岩間奏子委員、神田直弥委員、 阿部浩委員、鶴田淑子委員
（市長部局）	前田茂男総務部長、中村慶輔企画部長、金野洋和文化政策調整監、 阿部武志企画調整課長、（総務課長代理）荒木英義総務課長補佐
（教育委員会）	池田里枝教育次長、佐藤元教育次長、高橋浩平企画管理課長、真嶌斉企画管理課スクール・コミュニティ推進主幹、小松泰弘学校教育課長、 菅原智法学校教育課指導主幹、前田聡子社会教育課長、齋藤聡スポーツ振興課長
協議事項	本市の教育を取り巻く諸課題について ・酒田市における平和教育・平和事業のあり方について

１　開会

（阿部企画調整課長）

これより令和５年度第１回酒田市総合教育会議を開会いたします。

本日の会議の進行を務めさせていただきます企画調整課長の阿部でございます。どうぞよろしくお願いいたします。本日は、２名の方から傍聴の申し出をいただいておりますのでご報告いたします。なお、本日の資料につきましては傍聴の方々へも配布いたします。

それでは、初めに、丸山市長からご挨拶をお願いいたします。

２　あいさつ

（丸山市長）

令和５年度第１回目の総合教育会議にお集まりいただきありがとうございます。

今回この総合教育会議を開催するにあたり、私としては最後の総合教育会議となるため、少しわがままを言わせていただき、「酒田市における平和教育・平和事業のあり方について」というテーマにさせていただきました。酒田市の学校教育、社会教育で、平和教育や平和事業はどうなっているのか、また、このままでいいのだろうかという思いが常に頭にありました。特に、ロシアによるウクライナ侵攻があってから、改めて平和というものを、第一線で働いている成人を含め、子どもたちに、地域の風土として根付かせなければならないという思いがあります。かつて総務課では、終戦記念日前後に、映写会や講師を招いて戦争当時の話を聞いたりする事業をやっていましたが、毎年８月になると、広島、長崎に原爆が投下された日と終戦記念日には必ずテレビ番組で戦争や平和が集中的に取り上げられ、社会的に定着しているため、あえて市としてやらなくてもいいのではないかということで止めました。今、ロシアのウクライナ侵攻があり、止めたことを少し反省しています。継続して取り組まないと、子どもたち、孫の世代には到底伝わるはずがないのではないか、高校では修学旅行

で広島に行って学ぶことはあっても、小中学校ではおそらく無いわけです。教育行政として何か意図的に事業を打つ必要があるのではないかと思います。政治的なイデオロギーを絡めずに、平和の尊さ、いのちの大切さに焦点を当てた事業、教育活動ができないものか、教育委員の皆さんと議論する場があってもいいという思いがありました。結論を導き出す必要はありませんので、ご意見を集約できれば、今日の開催の意義はあると思っています。

今月、戦没者慰霊式があります。国でもやっていますが、酒田市でも社会福祉協議会会長と市長が合同で開催し遺族会の皆さんと慰霊をします。また、先週、平泉町に行きまして、「奥州藤原氏が紡いだ酒田市・平泉町の絆を未来につなぐ文化交流協定」を結んできました。あくまでも伝承ではありますが、酒田市と平泉町には縁があるということになっていますので、協定という形で意図的に平泉町との関わりを残していかないと引き継がれていかないのではないかという思いがありました。行った当日、毛越寺で「平和の祈り」という町の行事があり、平泉町の僧侶の皆さんが読経で法要をしたり、子どもたちが「平泉賛歌」という平和を祈る歌を歌っていました。奥州藤原氏の初代清衡公が、戦で疲弊した人、亡くなった人々を憂いてお寺を建てた、そうした活動に因んだイベントと見受けられましたが、近隣の首長や国会議員、県議会議員、県の幹部も招いて、町を挙げた良い行事だと刺激を受けて帰ってきました。

昨年も実現できませんでしたが、広島市長から原爆投下を受けた広島市民の思いを聴く機会等もあればいいと思っていました。改めて平和の尊さ、これは、いのちの尊さになると思いますが、皆さんの思いや、酒田市ではこれからどういうことをやるべきなのか、例えば、こういうことをやれるのではないか、そういったアイディアを頂戴できたらありがたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

（阿部企画調整課長）

続きまして、鈴木教育長からご挨拶をお願いいたします。

（鈴木教育長）

今日は、このような形で総合教育会議を開催していただき、ありがとうございます。

平和がテーマということですが、私が現役の時、夏休み中の部活動で8月15日に子どもたちと一緒にいることが多かったのですが、そういった時に、自分の体験を話した記憶があります。8月15日を終戦日としているのは日本だけで、他国では違う形で捉えていることもあり、常々子どもたちには、色々な人がいて、色々な考え方があると話してきました。そういった力を育むことが大事だと思って取り組んできました。

今回のテーマは、小学生も中学生も考える題材、避けては通れない事で、子どもたち同士また大人も交えて皆で話をして、色々な考え方を聴くことは大事なことだと思っています。そうした中で、自分には何ができるか、自分達は何をしていかなければならないのかということを、それぞれが考えるきっかけになればいいと思っています。それを夏の前後に何か取組めればいいと思っています。教育委員の皆さまからご意見をいただければ、参考にしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

３　協議

（阿部企画調整課長）

それでは、これより協議事項に入ります。ここからは市長に座長をお願いいたします。

（１）本市の教育を取り巻く諸課題について

（丸山市長）

それでは、テーマは、「酒田市における平和教育・平和学習のあり方について」ですが、酒田市の現状はどうなっているか、それから他市の例もありますので、最初に事務局から資料の概要について説明をお願いいたします。

（中村企画部長）

私の方から資料に基づいて説明させていただきます。

初めに、本市における平和教育、平和事業についてですが、学校教育では、小学６年生の社会科で日本国憲法、平和主義について学んでおります。６年生の社会科で地元の体験者から戦時中の話やシベリア抑留の話を聞いたり、総合学習の時間で酒田に空爆があったことなどを学習したという事例があります。中学校では、２年生の歴史で世界大戦から現在について学んでおります。また、修学旅行で広島や沖縄に行く学校もあります。東部中学校の事例ですが、唯一原爆が落とされた国に生まれた人間として原爆による被害を知ることと、グローバルな視点で日本と世界の平和を考えさせたいというねらいのもと、事前学習、現地での学習、事後学習ということで、今年度３年生 73 名が４月に広島を訪れています。現地では、広島市の高校生から対応いただいております。次に酒田市ですが、平成７年６月 21 日に、戦後 50 年を迎えるにあたり恒久平和を願う平和都市として酒田市平和都市宣言を行うということで酒田市議会において可決されております。３町と合併してから、平成 20 年３月 25 日に新酒田市として酒田市議会において可決されております。また、黙とうですが、原爆死没者の慰霊及び終戦記念日の戦没者追悼として、８月６日８時半から、８月９日 11 時２分、８月 15 日正午に行っております。平和の折り鶴は、毎年市民の皆さんから千羽鶴を７月中に受付し、本庁舎１階のフリースペースに展示した後、８月 19 日に被爆地の広島と長崎に送り奉納していただいております。広島の被爆樹木二世アオギリについては、戦後 70 年の節目にあたる平成 27 年６月 30 日に、市が加盟する平和首長会議を介して、広島市から贈られた苗木を飯森山公園に植樹しております。写真集「ヒロシマ」を出した土門拳ゆかりの土門拳記念館近くに植樹しております。過去の事業としては、平成 27 年度が戦後 70 年の節目の年ということで、「手と手をつなごう平和のつどい」を総合文化センターで映画上映とトークライブを行っています。酒田市資料館においては、「戦後 70 年　戦時下の青春」ということで、当時の酒田高等女学校や酒田実科高等女学校、酒田商業高校の生徒さんなど、戦時下でどういうことをしていたかを写真と共に企画展示をしております。「少年の翼」については、沖縄県今帰仁村との小学生の派遣と受入ということで、平成 30 年度に小学５年生、６年生 32 名を

派遣しています。受入については、今帰仁村立の小学校６年生 35 名を黒森小学校の 17 のご家庭で受け入れていただいております。次に、酒田市社会福祉協議会ですが、酒田市戦没者追悼式典を主催して行っております。今年度は７月５日に総合文化センターのホールで行われます。遺族会の会員数ですが、酒田、八幡、松山、平田にそれぞれ支部があり、現在、合計で 1,090 人と伺っております。次に、酒田ユネスコ協会ですが、令和４年度の新規事業で、平和の鐘を鳴らそうというテーマのもと、昨年７月 19 日に海向寺で実施されております。土門拳記念館では、被爆ピアノコンサートということで、広島市在住のピアノ調律師、矢川光則さんの活動として土門拳記念館で実施されております。また、昨年の９月３日から 10 月 16 日まで、酒田市美術館と土門拳記念館の共同企画として、「2 つのまなざし　江成常夫と土門拳　ヒロシマ・ナガサキ」という企画展示をしております。次に、生涯学習施設「里仁館」ですが、今年度９月、10 月、11 月の３回にわたり「庄内の戦争 体験者の証言」ということで講座が行われます。課題としまして、終戦から 77 年が経過し、戦争や平和への意識の希薄化が懸念されていると捉えているところです。

続いて、他市の平和事業の状況です。山形市では、山形市平和都市宣言事業として、記載の事業を実施されている他、毎年８月６日、９日、15 日に「千年和鐘打鐘式」を行っています。鶴岡市では、「平和の集い・資料展」ということで、シベリア拘留体験者のお話を聞いたり、「東京大空襲・庄内の空襲」証言映像上映等を行っているようです。また、米沢市では、米沢市平和都市宣言事業ということで、平和学習会に中学生７名が参加して、ウェブ上で広島平和記念資料館の方からお話を聴き、その後ディスカッションをされているようです。岩手県平泉町では、６月 29 日に「平和の祈り」という事業を行っております。岩手県の条例になりますが、「平泉世界遺産の日条例」というものがあり、平成 23 年６月 29 日に世界遺産になったことを記念して制定されております。続きまして、新潟市ですが、全部で 16 の平和推進関連の事業をやられております。新潟市は昭和 20 年８月 10 日に空爆を受けておりますが、同じ日に本市でも大浜に空爆がありました。その日に献花式等行われております。続いて、長岡市ですが、ホームページを見ると、県内唯一の大規模戦災都市として、市内全地域の市民出席のもと、戦没者を追悼するとともに平和の尊さを力強く発信しますという平和の祈念式典を毎年やっております。また、８月１日に大規模な空襲を受けており、市街地のほとんどが焦土となりました。長岡花火大会は、その２年後の昭和 22 年８月１日に復活しており、その翌年から８月１日を戦災殉難者の霊を慰めることに重きを置くことにして、花火大会は毎年８月２日、３日に変更して現在に至っております。広島市、長崎市については、記載のとおりです。

世界の情勢については、ロシアによるウクライナ軍事侵攻により、一般市民が犠牲になっているほか、核兵器使用の危機感が高まっている現状かと思います。他にも世界の中では紛争や内戦が今も続いている地域があります。

最後の表になりますが、平和について考える機会ということで、就学前から社会人までの時期で、学習機会の場、考えられる取組みについて整理したものです。説明は以上です。

（丸山市長）

酒田市も色々な事をやっているように見えますが、山形市や新潟市はすごいという思いで資料を見ていました。皆さまはどう感じられましたでしょうか。イベントをすることにも意義はあると思いますが、学校教育であれば日常的な教育活動の中で、社会人であれば世代関係なく参加できる平和を考える機会があってもいい、こういう時期だから何か仕掛ける必要があるのかなと思った次第です。

現状を見て酒田市としてどうあるべきかご意見をいただければと思います。また、酒田市の平和都市宣言は、原案の起案から碑文の作成まで、池田教育次長が担当されていましたし、議会の議決も経ていますので、その当時の市の皆さんの思いをお尋ねしたいということでも結構です。それでは、岩間委員からよろしいでしょうか。

（岩間委員）

平和について、今回改めて考えるきっかけになったかなと思います。高校生の時に修学旅行で初めて広島に行きました。現地を見学する中で、痛ましいことや戦争はいけないことだと感じることは大事ですが、戦争の事を学ぶ機会は、時期が来れば、テレビ等で思いを馳せたりすることはあるのかなと思います。

酒田市ならではの点で言うと、土門拳は外せないと思っています。土門拳が見た時代、カメラが捉えた瞬間、それが今でも酒田市の土門拳記念館に収蔵されているので、この財産を活かすことはできないかと考えました。さかた文化財団からの案内で一度観た後、今回の会議のテーマを聞いて再度観に行きました。最初に観た時は、悲しい思いになり、戦争は人を傷つけ何も良いことは生まないと思いながら眺めました。再度行って解説を読んだ時、写真に写っている方々の眼差しなどを観て思いを寄せる、そういうタイミングが大事なのかなと思いました。戦争はいけないことだと価値観を押し付けるのではなく、作品を観て感じる機会を作ることが一番大事かと思いました。酒田市美術館での鑑賞を通したスクールプログラムは好評だと伺っています。教室の外に様々な機会が創出されて、学びが展開されることは素晴らしいことなので、これからも継続してほしいと思います。酒田市美術館だけでなく、土門拳記念館も舞台に、酒田らしい教育ができたら土門拳先生もそこに関わる皆さんからも喜ばれるのではないかと思います。平和事業とあえて言わなくても、土門拳の写真を身近に感じ、平和とは何かを考える時間を大切にしてほしいと思います。土門拳記念館に足を運んで価値を身近に感じ、その近くにある被爆樹二世のアオギリ、平和都市宣言の石碑を知ってもらうだけでも、土門拳を通して学ぶことは沢山あると思います。義務教育だけでなく、大人も一緒に平和を学ぶきっかけとして土門拳記念館を活用していただければと思いす。

（丸山市長）

酒田ならではという点で、土門拳は、戦時中の写真を多く撮っていますし、「ヒロシマ」という原爆直後の写真があります。それを題材に、子どもたちが戦争の悲惨さを学ぶことは大変大切なことですし、酒田ならそれができます。土門拳記念館でのスクールプログラムを学

校教育の中に組み込んでもらい、小学校、中学校で、必ず一度はそこに触れる機会を作ってもらえたらありがたい、また、そういう風土にしたいという思いで聞かせていただきました。こうした取組みを学校にお願いすることは難しいでしょうか。

（鈴木教育長）

スクールプログラムは、各学校が主体的にやりたいことを優先的にやっています。土門拳記念館でのスクールプログラムを全校でやろうと校長先生方と相談して合意形成は図れると思います。何の時間を使ってスクールプログラムに参加するかは、各学校の工夫次第だと思います。しかし、実施する時に一番気を付けなければならないのは、ゴールは決めないということです。同じ写真から何を見出すか、それぞれが思うところを言い合いながら、お互いが考えていることを練り合わせていく、皆で語る対話型学習が良い学習だと言われています。大人が願うようなことに持っていくのではなく、子どもたちが感じたことを自由にお話しするという意味では非常にいいのではないかと思います。

（丸山市長）

授業のやり方は学校それぞれだと思いますが、土門拳記念館で土門拳の写真に触れて、皆で考えようという授業を、この学年で必ず１回はスクールプログラムを組んでやりましょうと校長会に出した時に、やらないといった学校はやらなくなる。学校長の判断ではなく、教育委員会が学校教育のカリキュラムに組み込んで皆でやるという方針を打ち出して、全校で実施してもらうことは難しい話なのでしょうか。

（鈴木教育長）

アウトリーチは、今も全ての学校が小学５年生で実施していますが、合意形成を図ってやっています。土門拳記念館でのスクールプログラムも、何年生でやるかは議論の余地がありますが、命令ではなく合意を図って皆でやるということは十分できると思います。

（丸山市長）

できれば、教育委員会として合意形成の場を作ってもらえるとありがたいと思います。かつて日本は、価値観を押し付けるような教育を歩んだ経緯がありますので、危惧されることは承知していますが、イデオロギーを絡めずに何とか平和教育ができないものかという思いがあります。

続いて、神田委員はいかがでしょうか。

（神田委員）

このテーマをいただいた時に最初に感じたのは、捉えどころが無くて難しいと思いました。平和教育、平和事業を題材とした時に、平和をどう定義するのか、また、資料には、平和への意識の希薄化が懸念されているとありますが、平和への意識とは何なのかといった多様な考

え方あるのではないかと思いました。平和を辞書で調べると、戦争や紛争がなく、世の中が穏やかな状態にあることと広辞苑には書いてありました。これは安全の定義と似ています。安全の定義は、許容できない危険が無い状態、危険が無ければ安全であるということで、安全そのものは定義できない。同様に、平和も、許容できない何らかのリスクが無い状態だろうと考えました。そこで、平和を脅かすリスクは何かと考えた際、戦争だけではなく、貧困や差別、いじめの問題、場合によっては環境破壊も含めて、平和を脅かすリスクであるという捉え方をしている例もありました。これらも含めて平和教育を考えるのであれば、大変な広がりをもつということだけでなく、既に教育は充分行われているのではないかという気もしました。そうなると、そもそも平和意識の希薄化が課題なのかどうかも悩ましい、平和意識をどう表現できるかということも色々な研究があり、非常に難しいと思いました。広島大学の平和作文、中学生を対象に調査したものですが、思いやりや人種差別をしない、お互いに分かり合うような相互理解ができるかどうか。また、権力の差が無い、経済格差が無い、ジェンダー、ダイバーシティ。あとは、平等や国際協調、衣食住が充実しているかどうか、最低限の生活ができるかどうか、こういったことが平和に関係しています。このように、平和の捉え方を明確にしていくと、現状、教育がどの程度行われていて、子どもたちの意識がどうなのかを探らないことには、教育のどこが足りていなくてどの部分を向上させていくのかが見えにくくなってしまいます。まずは調査が必要なのかなと思った次第です。それだけでなく、行政として平和教育や平和事業を仕掛けることの意義は、子どもたちに価値観を植え付ける側面もあると思いますが、一方で、平和都市宣言をしている酒田市が市としての平和に対する姿勢を示す部分もあると思います。一度平和都市宣言をしただけでは、ここに住む我々の気持ちも薄れてしまいます。どのような効果を持つかは別としても、何らかの事業を継続して行うことには意味があることだろうと思います。何ができるかということでは、スクールプログラムで土門拳記念館を活用するというのは、酒田市ならではで良い事だと思います。また、鶴岡市の戦争と平和を学ぶマップは、実際に疎開児童が何人来てどこに宿泊して、どこが空襲を受けたかが分かるものになっています。酒田市も空襲を受けた場所があると思いますので、教材として活用できるように資料を作って、それを使って学校で勉強してもらうようにできればよいかと思いました。教材を開発するということは、先生方が平和についてどのように教えるかを考える時、自身に知識が無いとやりにくさもあります。教育のやり方を決められていても息苦しさあります。市として教材を整えて、自由に活用できるものとして整理をする。その一つが土門拳記念館を上手く活用したスクールプログラムだったり、空襲でどのような被害があったのか整理されたマップだったり、また、これらを学校だけでなく社会教育でも自由に活用していただいても構わないと思います。戦争中の体験を語られる人が少なくなってきていますので、こうしたものもアーカイブ化して、公文書館に記録を残していくというような、この場所に来ると欲しい情報にいつでもアクセスできるという形でもいいかと思いました。

市としての姿勢を示すために、何かをした方がいいとは思いますが、様々な取り組みにどの程度の人が集まって、その人達にどのような効果があるのか悩ましいところです。それは

それで検討していきながら、まずは活用可能な素材を提供していくことからやっていくのがいいかと思いました。

（丸山市長）

平和の定義は確かにおっしゃる通りで、戦争から入ったので固定観念があったかもしれません。東部中学校が広島に修学旅行で行ったことはすごいことだと思いました。こちらから働きかけた訳ではなく、情熱のある先生の考えで子どもたちが広島に行って原爆資料館を観てきている。これはすごいことだと思いました。広島や原爆を切り口に、戦争ではあるけれども、平和について考え、貧困や差別にも思考が広がっていくのだろう思います。平和の切り口はものすごく広く、我々も焦点が絞りにくいが子どもたちも絞りにくいし、具体的な良い例が無いと子どもたちは入っていけない。そういう意味で、原子爆弾の被害を受けた広島や長崎から入るのは有りなのかなと思いました。広島には石碑があり、「安らかに眠って下さい　過ちは繰返しませぬから」と書いてあります。しかし、世界を見れば過ちを繰り返している。我々から世界に訴える行動を起こさないといけないのではないかなという思いがあります。

教材作りも確かにその通りだと思います。娘が小学生の時、宿題で、戦争の経験をお爺ちゃんお婆ちゃんから聞いて巻物にするというものがありました。父親の経験から、爆弾で同僚を亡くした時のことを絵にしていました。生々しい絵でしたが、学校から評価を受けて今も娘が大事に持っています。今、そういう経験を語れる人がいなくなっています。我々は、頭では分かっていても経験していないので本当の辛さは分からない、分からないけれども何らかの形で伝えていかなければならない。広島と長崎の原爆資料館は、観るとすごく衝撃を受けると聞きます。そういう意味では、教材作りは必要かと思いました。本来、教育研究所はそういう機能を持っているはずなので、やってもらえるといいかと思いました。デジタル教育だけが教育研究所の使命ではない気がします。IT スキルを高めることも必要ですが、平和教育に焦点を絞って、戦争を経験した方も巻き込んで教材を作ることは必要かなと聞かせていただきました。

（佐藤教育次長）

東部中学校が広島に行くにあたり、子どもたちにどういった対応をしていたか聞いたところ、昨年度中に資料館の方から学校に来てもらい、酒田の戦時下の生活や集団疎開の様子を資料館の資料を掲示しながら事前に学習していました。また、教育委員会で作成した中学生向けの「酒田の歴史」という冊子があり、その中に戦時下の状況が載っています。これまでの話を伺いながら、例えば、鶴岡市のマップのように、もう少し簡単に手に取って子どもたちに紹介できるような形もありだと思いました。広島でも被爆された方の語り部は少なくなっています。それを広島市では、二世三世ではなく、あえて高校生が引き継いで語れるようになってきています。もう一点、東部中学校の修学旅行で高校生との関わりを広げたきっかけとして、自分と近い世代の人が語ってくれることによって、未来を思考できるのではない

かという思いがあったそうです。広島の資料館は、かなり衝撃的な展示もあり、子どもたちがショックを受けすぎて二度と広島に行きたくないという子も出てしまう。そうではなく、事前に酒田で学んだことに加えて事実を目の当たりにし、同じ世代の人から話を聞くことによって、これからできることは何かということに目を向けてもらい、未来志向で帰ってきたということでした。体験を通じて、文献を読んだり話を聞いたりと酒田でできることをやっていても他人事だったというのが子どもの感想でした。自分事として捉えて、自分がこれから何をしなければならないかという思いに至った子どもが結構いたそうです。それが一番の成果だとおっしゃっていました。

全市を挙げて広島に絡めることは難しいかもしれませんが、いただいたご意見のように、土門拳さんの作品や資料をまとめた冊子、これをもっと使いやすい形にして子どもたちにきちんと届くような形に整えていくことをこれから考えていかなければならないと思いました。

（丸山市長）

東部中学校の修学旅行のように、事前学習、帰ってきてからのケアも含めた学習には、行動経費への支援があってもいいのかもしれません。修学旅行は自分たちで積み立てて行くので、広島のように遠い所は経済的な負担が大きい訳です。こういった教育活動は大事だという市の方針、姿勢を示して力を入れるのも必要かなという思いで聞いていました。

平泉町も平和首長会議のメンバーで、平泉に行ったら平和ということを叩き込まれてきました。広島に行かないまでも、小学生が修学旅行で平泉に行くのは距離的にも近いので、今回の協定を契機に、市としてそこに支援するのもありかもしれません。奈良のお寺を観た時も感じましたが、中尊寺もあれだけの仏像を造るに至った背景、亡くなった方の慰霊、目の前にすると説得力があります。そういう感覚を子どもたちにも植え付けられるのではないかと思います。原爆の資料館は小学生には厳しいかもしれませんので、小学生には平泉はちょうどいい気がします。８月に平泉の小学生が酒田に来るという話でした。子どもたちが交流するにはいい距離感で、歴史的な背景も共有できていいかなと思いますし、酒田の子どもたちが平泉に行けば平和を学ぶ入り口としていい効果があるかもしれません。

それでは、阿部委員いかがでしょうか。

（阿部委員）

私は高校の修学旅行で広島に行きました。20 歳の時に社員旅行で長崎に行きました。40 歳の時、青年会議所の卒業式が広島の原爆ドームの隣でありましたので広島に行きました。３回被災地に行きましたが、高校生の時は怖いなとか可哀想だなといったイメージしかありませんでした。20 歳で長崎に行った際も同じで、どこか他人事のような感じで見学しました。40 歳の時はすごく興味深く原爆祈念館を観させていただきました。高校生の時と何が違うか考えた時、40 歳の時には子どもがいたこともあり、親になって観る視点が変わったのかなと思います。自分の未来より子どもの未来を考えて物事を見てしまう違いかと思いました。

酒田の平和ということですが、今と過去と未来を三つに分けて考えてみました。酒田でも

空爆はありました。捕虜施設が本町３丁目辺りにあったという記載もあり、酒田で実際にあったことを子どもたちに伝えていくのも一つかと思います。今、小学生の子どもがいますが、まち探検として酒田市内を巡っている中に、その機会があってもいいと思いました。酒田の過去を知るということはとても必要だと思います。やはり、土門拳の写真を観る、映像ではなく写真を観るということが大切なことかと思いますし、観てどう思うかで終わらず、その先を考えていけるようなディスカッション、じゃあどうしたらいいかと子どもに投げかけてあげられるようなディスカッションの場を何か一つ設けていければと思います。保護者である私も戦争を体験した訳ではなく、かろうじて祖父が戦争に行っており、体験者から話を聞いた一人でもあります。見て、聞いて、リアルに触れることによって、何を考えてどう未来に繋いでいけるのか、保護者として思っているところです。

東部中学校が広島を訪れていましたが、今は Zoom 機能もありますので、被爆地の広島や長崎、沖縄の子どもたちと対話の機会を設けるものいいかと思います。酒田の子どもたちが酒田の過去を知って考えていること、感じていることを、実際に被災地の子どもたちと意見交換をして更に感じることもあるでしょうし、未来に繋いでいかなければならないこともあるだろうと思います。自分の考えを認めてもらい相手の考えも認められるような、多様性を認められる力、これは教育大綱の「「いのち」の大切さを学ぶ教育の推進」と「豊かな心と健やかな体の育成」にも繋がっていくのではないかと思いました。

調べていましたら、昭和 30 年 8 月 10 日付けの日刊庄内の社説を見つけましたので、少し紹介させていただきます。「人間の災いは、どんな時にどんな姿でやってくるか分からない。逆に何が幸いして災いを防いでくれるか分からない。ただ、己の身の安全だけを願ってもひどい目に遭うこともあり、自分はともかく多くの人を救おうとしたことが、かえって自分を助ける結果になる場合がある。どうなるか分からない世の中で、せめて自分は皆のための幸福を願って生きたいと思う」と書いてありました。正に多様性を認める、そういうことが必要なのではないかなと思っています。人の喜びが自分の喜びに変わるような、誰かの幸せを願って生きられるような子どもたちに、そういう機会、きっかけを与えていけるような場所があるといいと思いました。

（丸山市長）

酒田にも残っている戦時中の色々な足跡を巡って知るのも非常にいいと思います。広島の小学校との遠隔でのやり取りも、やる気があれば機会を設けられるだろうと思いますが、実際、学校教育でやる場合に、限られた時間数の中で各学校がどう判断されるか。先生方の限られた時間の中で授業を設けてもらえるのであれば、我々としては大変ありがたいと思いますが、そんな時間は無いと捉えられると取り組んでいただけないということになります。教育委員会の方でしっかり議論をしていただいて、正規の授業としてぜひ取り組んでもらいたいと思います。気になるのは、その授業でイデオロギー的な思想に偏らず、絶対的な価値としての平和の尊さといった軸足で最初から最後まで進めることができるかどうか。必ず思想的な背景が絡んでくるような感じがします。純粋に、教育として、人間愛の教育として最初

から最後まで授業が組めるか、先生方も悩むところかと思います。特に、講師や指導者を他から招く時は、コントロールができるか悩ましい話かなと思いますが、学校教育の中に盛り込むことができれば、酒田の教育風土としては素晴らしいのではないかなという思いで聞かせていただきました。

それでは最後に鶴田委員いかがでしょうか。

（鶴田委員）

私の祖父が戦争を体験していまして、戦地では記録係として写真を撮る係をしていました。爆弾が脇に落ちてきて、帰ってきてからは片耳が聞こえない生活をしていたようでした。祖父に戦争の話を聞いても頑なに語らないので、子どもながらに緊迫したものを感じ取っていた記憶があります。戦地で写真係をしていたからか、小さい頃から土門拳記念館に度々連れていかれました。家族は何も言ってきませんでしたが、戦争の写真を一緒に観て回っていました。その時に一番心に残っていた写真が、広島で子どもが傷を負っている写真で、生々しく記憶に残っています。それと同じ位記憶に残っているのが、戦後の日本で戦争孤児になった子が、生きていくために新聞を売って生活費を稼いだり靴磨きをしたり、悲惨な生活を送っているはずなのに、そこに希望を感じるような表情をしている写真で、子どもながらに色々なことを感じ取ることができました。そのような経緯があり、中学生の時に終戦から 50 年が経ち、そうしたテーマで文化祭をしたり、学校教育で光丘文庫に行ったりフィールドワークをする中で、この辺りに防空壕があったと教えてもらったり、高校の修学旅行で長崎に行って平和祈念像の前で黙とうしたりと、学校教育の恩恵を得て平和について考える機会が多くあったと実感しています。酒田市として、そうした取り組みをしていくことは良いことかと思っています。

中学校の合唱で、戦争にまつわる歌を歌うことになり、その頃の生活を見てみようということで、「火垂るの墓」を観たりして、そこでも感じるものは沢山ありました。最近子どもたちと接していて実感しているのは、テレビを通してロシアとウクライナが戦っている、それは見て分かる、平和についても少し考えるけれども、実際の生活には影響がないので戦争は非現実のイメージで捉えているということです。戦争は日常生活の延長上で起こることだと私はよく話をするのですが、そういう視点で話をすることは大切だと思っています。土門拳さんの「ヒロシマ」という写真集は、目を覆いたくなるような写真の数々で、実際に、子どもたちをミライニに連れていき観たのですが、あまりに生々しいので、ちゃんと本を開いて見られないくらいでした。そこから感じ取ることができることもあり、小さいうちから戦争や平和について考える時間は大事かと思います。自分と似た年齢の子どもたちが、戦争が終わった社会でどのように生きていたのか、そういう写真が残されているので、自分の生活の延長上で観られるような作品を通して学ぶという時間はすごくいいのではないかと考えています。日常の教室の中や家庭の中でも、お互いに分かり合えない瞬間は沢山あると思いますので、そこで言いたいことをお互い伝え合って合意形成していくところから平和の教育は始まるではないかと思います。学校教育だけでなく、保護者の方や大人に対してのアプローチも

必要ではないかと思います。

（丸山市長）

日常生活の延長にあるというのは正にその通りで、子どもたちがそういう意識で感じ取ってくれるかどうかが大事だと思います。アニメの世界から頭の中で同化させているような、それは現実の戦争の悲惨さや、いのちの大切さを自分事として捉えていることになるのか怪しいと思うところがあります。バーチャルの世界では理解しているかもしれませんが、爆弾が落ちて痛いと感じている訳ではないから難しい。大人に対するアプローチも、家庭教育でできていればいいと思いますが、酒田の親御さんが子どもを土門拳記念館に連れて行って写真を観るご家庭はほとんど無いのではないかと思っています。お爺さんが連れて行ったことはすごいことだと思います。言葉にはしないけれども、無言に戦争の悲惨さを孫に教えてあげたいという思いがそこにあったのではないかと思って聞いていました。家庭でも自分事として捉えられるような家庭教育、家庭環境があれば、平和やいのちを真剣に考えるお子さんが育つのではと思いますが、我々も戦争を知らないので、家庭の自主性に任せていられない、意図が必要なのが今の時代だと思います。マスコミの報道もありますが、子どもたちに対しても悲惨な報道がニュースにも出てきます。真剣に考えないといけないのではないかと思います。

かつて、中央公民館の事業で、リゾート大学沖縄酒田村という事業があり、随行で今帰仁村に行って、摩文仁の丘の慰霊碑やひめゆりの塔を拝んできました。ねらいは戦争の悲惨さを学ぶことでしたが、寒い時期に暖かい沖縄で体を休め、本土から沖縄に観光客を呼ぶことで沖縄に経済的な波及効果をもたらすこともありました。高齢者の参加が多く、自分の戦友が亡くなっていて涙を流す方もいましたが、私はまだ 20 代で戦争を体験していないので、頭では分かっていても本当の悲しみが湧いてきませんでした。民宿の方と語り合う時間もあり、沖縄の人の話を聞くと悲惨な戦争だったと分かりました。こうした事業は社会教育の事業で、非常に良い経験になりましたが、行政として、労力とコストがかかる事業は省かれていきます。話を聞く中で、事業によっては、意義のあることは引き継ぐことも考えていかなければならないかなと感じました。自分が社会教育主事だったこともあり、社会教育にはこだわりを持っていて、社会教育というのは、行政なり社会が意図的に教えなければならないことがあるのではないかという思いがあり、社会教育の重要性を強く思っています。学校教育で学んだ子どもたちは、いずれ社会人になる訳なので、学校教育でしっかり教え社会人になって反映され、親が子に伝えるという意味では、学校教育と社会教育の相乗効果がある気がするので、一体として取り組んでいなかければならない、教育行政の重要性はそこにあると思います。社会教育にしても学校教育にしても、教育委員会で教育行政としてこういう方向に持っていきたいと決めていただかないことには、各学校それぞれの親御さんには伝わっていかないと思うので、しっかり議論した上で具体的な事業を組み立てていただければよろしいかなと思います。特にお話を聞いていて、土門拳記念館と土門拳の写真の影響力、素材としての力、発信力を酒田としては有効に活用していくべきだろうと思いました。土門拳文化賞の

審査委員長をしていただいている江成先生は、土門拳のリアリズムをすごく真剣に受け止められていますので、土門拳の写真の語り部として江成先生は非常に強力な方だと思っています。文化政策課もありますので、我々も教育委員会と一緒に、何らかの形で土門拳の訴える力を市民に伝えていきたいと思います。

４人の委員から話を聞かせていただきましたが、それぞれお聞きになって、お話しておきたいことはありますでしょうか。神田委員は、東北公益文科大学の学長でもありますので、酒田以外の出身の学生が多い訳ですが、大学の活動としても酒田にある大学という意味では、機会があれば何か企画していただくとありがたいと思います。

（神田委員）

学生は、４年間酒田で過ごす訳なので、この地域について理解を深めてもらうことは当然必要なことだと思います。これから国際系の学科も作っていきますが、世界に出て行けば自分の暮らしている地域について語れることは当然求められます。15 回の授業は難しいかもしれませんが、１、２回は何かできないか考えてみたいと思います。

（丸山市長）

最後に教育長からお願いいたします。

（鈴木教育長）

学校教育に関して言えば、子どもたちに身に着けてほしい力、能力は、普遍的なものだと思っています。私がずっとテーマにしているのは、エンパシー、共感力をキーワードの一つに持っています。他者の立場で考えることができる力はすごく大事なことだと思っていて、少し前だと、クリティカルな思考、色々な立場で色々な所から物事を見ることができる力。その上で、自分の考えと周りの考えを上手く擦り合わせていける、お互いが納得した答えを導き出せるような力がすごく求められていると思っています。その中で、色々なテーマがある訳ですが、平和をテーマに議論していくことはとても大事なことだと思います。大人も含めてですが、子どもたち同士が同じものを観て議論する、酒田には土門拳という他に無い教材があるので、有効に活用していければと思います。スクールプログラムやアウトリーチは、始まって２、３年ですが、小中９年間の中にプログラムとしてどう置けばより効果的か、その視点から考えると、例えば、５年生でどの学校の子どもたちも土門拳記念館に行き、中学生ではこういうことをやろうと定まってくるのではないかと思いました。そうなると先生方からも合意を得られるかもしれない。そうした進め方ができればと思って聞いていました。

今年度最初の校長会で、今の私の課題は、保護者、大人の教育をどうするかということだと話しました。社会教育にも触れて、いくら学校で子どもたちに話をしても、それは違うと家で言われるとリセットされて学校に戻ってくるという悩みもあります。保護者世代もターゲットにした仕掛けをしていかなければならない。そういう意味では、学校教育も社会教育も両面で捉えていかなければならないと思っています。いずれにしても、平和や歴史を知っ

た上で、自分たちが住む社会が豊かで平和な社会になるように、自分が何をするかを考えられる子どもたちになるような取組みを考えていきたいと思います。

（丸山市長）

山形市の千年和鐘打鐘式は、思いを込めて鐘をつく、まちの姿勢を示す上で象徴的でいいなと思います。また、平泉町は平和を祈る町ということで、鐘を突くことに思いを込めている町でした。土門拳記念館でのスクールプログラムや修学旅行で広島に行くといった学校教育もそうですが、酒田市として象徴的な事業は、行政が継続して取り組むべきだろうと思いました。そうしたことも含めて、また議論させていただければありがたいと思います。

（２）その他

（丸山市長）

皆様方から何か確認したいことなど、教育行政以外の事でも結構ですので、何かあればお聞かせいただければと思います。総合教育会議の重要性については、次の市長にしっかりと引き継いでいきたいと思いますので、引き続きご協力いただければと思います。

（阿部企画調整課長）

次回の会議日程につきましては、具体的な開催時間、協議事項等について改めて事務局よりご連絡を申し上げますのでよろしくお願いいたします。

４　閉会

（阿部企画調整課長）

以上をもちまして、令和５年度第１回酒田市総合教育会議を閉会いたします。どうもありがとうございました。